説教20220807創世記15：1-6ルカ12：32-40「神に向かって目覚めている」

　私たちのこの地上での歩みの一歩一歩は何処へ向かっているかと言いますと、それはこの地上での死ではなく、そこを通り越して最後の最後にキリストと顔と顔を合わせて出会うときであります。しかし、この様に考えているのにも一つの思い込みがありまして、私たちがイエス様に出会うのは、必ずしも、この地上で死んでから後のことではなくて、この地上で生きている時に、将にこのところにイエス様がやってこられることもあり得るのです。

使徒信条では、「かしこより来たりていけるものと死ねる者とを裁き給わん」という様に、いけるものと死ねる者と、明言しています。

また今日の聖書箇所ルカ福音書の１２章40節、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」というのもそのことを言っているのです。

将にこのところにイエス様がやってこられる、という信仰は、なぜか今の私たちの多くが、目を覚まして保ち切れていない信仰となってしまっています。それは神学者たちも認めているところで、そのことを再臨の遅延などと言って説明しています。つまり、イエス様があまりにも長い年代にわたって再臨されないので、その遅れている理由を認めて、少し腰を据えてその再臨の時を待とうではないかというわけです。しかし本当は、イエス様の言葉に従って、明日にでも来られるイエス様の再臨の時に備えて目を覚まして用意している信仰を保つ方が、私たちは幸いです。

実際に、イエス様が再臨される時を今か今かと待ち望んでいたのが、パウロ達の時代でした。紀元後１世紀のことになります。その再臨の時の有様は具体的に目に見える形で聖書に記されています。

テサロニケの信徒への手紙一　4章 16節から

すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。

この、イエスキリストと出会う再臨の出来事が、今ここに生き残っている私たちの上にも、このように目に見える形で起り得るのです。

そして聖書が言う通り、その日その時は誰にも分からないのです。明日、結婚式を行うことに定められている人たちの上にも、明日、仕事の予定がある人の上にも、等しく、このイエス様の再臨の時はやってくるのです。

イエス様の再臨に対する信仰の在り方が、現代に生きる私たちと、パウロの時代とではかなり違っていることが分かってきましたが、このことは私たちの救いに関わる大切なことだと思います。なぜ現代人はパウロのように、思いがけない時に来られるイエス様のために用意して待っていることが難しいのでしょうか。言葉を替えて言えば「目を覚ましていられない」のでしょうか。ここでは信仰とはどういうことかということに焦点を当ててみて参りましょう。

明日来られるのか、１年後か、はたまた1000年か、とにかく、思いがけない時に来られることになっているイエス様を、用意して待っているということは信仰なくしては出来ないことでしょう。では、目を覚ましてイエス様を待っている私たちは、その待っている間、具体的には何をやっているのでしょうか。ここでイエス様ご自身が引き合いに出している泥棒のことを考えるのもためになるかも知れません。私たちは、泥棒に対しては、いつ何時も警戒を怠らず、常に心の片隅に忘れることなく、泥棒を家の中に入れない様にという配慮を怠らないことでしょう。裏を返せば、私たちは泥棒という歓迎せざる来客の姿を、いつまでも四六時中思い描くことが出来るのです。今では、手ぬぐいを鼻の下で結んで、如何にも泥棒ですという出で立ちの泥棒もいないかも知れませんが、それでも私たちは各自のうちにひとつの泥棒のイメージを持っていることでしょう。それゆえ、泥棒が実際やって来た時のことをイメージし、実際の対処法を用意していることも簡単なのだと思います。

では、イエス様がやってこられる時のイメージはどうでしょうか。先ほど、テサロニケ１に記された、その再臨の時の様子を聞きましたけれども、私たちが、「空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます」、という様に、具体的にその様子が記されているものの、なぜか私たちの内に確かなイメージが結ばれない、ことも確かであります。

私たちの内に確かなイメージが結ばれない、ことは、実は、私たちには思い描くことも出来ず、はかり知ることも出来ないイエス様の大きさと深さと豊かさを示しています。逆に、簡単に私たちの内にイエス様の確かなイメージが結ばれてしまったならば、それは、私たちがイエス様の大きさ、深さ、豊かさを、自分たちの小さなイメージの中にして取り込んでしまったに過ぎないでしょう。

私たちは、最後の最後にイエス様と顔と顔を合わせて対面するその時まで、イエス様とはこういうお方だ、とイメージする事を赦されていないのです。それは、言葉を替えていえば、その時まで私たちは、イエス様を見ることが出来ないということです。

決して見ることが出来ないイエス様のために用意して、目を覚まして待っている私たちは、実に信仰者なのです。

信仰する人、信仰者の特徴として、

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。（2コリ4：18）ということがあります。

そして見えない者に目を注いでいる私たちは、その言葉を聞くのです。見えない者の言葉を聞くためには祈ることが必要です。目に見えない神に向かって祈るということは、神の言葉を求め、そうして神の返答を得るという、神との対話であります。

信仰するということは、圧倒的に聞くことであり、見ることではありません。イエス様の御言葉を聞く事の大切さは今更、説明するまでもありませんが、イエス様の御言葉をいつも心に留めて、イエス様と対話をして日々を過ごしていますと、間違いなくイエス様と私との関係性は深まって参ります。イエス様が言われていることが分かってくるようになります。そうして悲しみを喜びに変えて下さるイエス様と深い仲になることが出来るのです。イエス様の計り知れない慈しみ深さに接して、私たちは自らの行いをも、その慈しみ深さに倣うものとされていくことでしょう。

では、見るということを主イエスはどのように考えておられるのでしょうか。見るという私たち人間の営みを、主イエスは決しておろそかにはされません。その最たることが、私たちが聖餐のパンと葡萄酒に預かるという営みに見られます。聖餐のパンと葡萄酒を見て私たちは、計り知れない喜びと安心、平和を得ることが出来るでしょう。なぜならそこに見えないイエス様の姿を見ることが出来るからです。

但し、その聖餐の場に、常に伴っているのはイエス様ご自身の、「これはあなた方に与えられる私の血である。これはあなた方に与えられる私の体である」という御言葉であります。この御言葉なしには、パンと葡萄酒はただのパンと葡萄酒でしかないのです。

この様に、パンと葡萄酒はイエス様の御言葉と深く結びついてこそ、その意味をなし、その身の置き所を得るのです。このことはこの世の全ての見える被造物についても言えることで、そこらへんに立っている木々や建物も、イエス様の御言葉によって祝されてこそ、その意味を持ち、その確かな役目を見出すことでありましょう。

いまだ信仰を持っていない方には、実感がわかないことかもしれませんが、私たちの信仰の父と言われているアブラハムのことを見て参りましょう。

創世記15章 5節から

主は彼（アブラム）を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

これがアブラハムが主なる神を信仰した始めであり、アブラハムは主のこの御言葉を信じたのでした。そうして、この様に主の御言葉を信じて、義とされた者たちの連なりによって、今の教会があるのです。ここでも主の言葉を聞くことから始まっていて、主の言葉を聞き、それに従って行くという日々の営みによって、私たちは主イエスとの関係を深くされ、益々主の慈しみと義に生きる者とされていくのです。

でも同時に主なる神は、見る、ということを疎かにせず大変有益に活用されています。主なる神はアブラムに天に満ちる星々を見せます。見よ、と主なる神は言われています。そうしてその美しく光り輝く満天の星が、あなたの子孫の様であるとアブラムに言われるのです。アブラムがこの主の御言葉を信じたのには、この星々の美しさもその一端を担っていたことでしょう。そして、ここにも、主の御言葉と見える被造物との結びつきがあります。

主の御言葉を聞く事で、私たちは折に触れて、主から、喜ばしく美しい者や出来事や事柄に出会うようにされています。ですから私たちに見出される善き出会いの場面には、必ず、主なる神の御言葉が先だって有るのです。

では、ルカ福音書に戻り、最初の、なぜ現代人はパウロのように、思いがけない時に来られるイエス様のために用意して待っていることが難しいのでしょうか。という問いに応えていきたいと思います。

イエス様が御言葉によって私たちに告げ知らされ、もたらされる喜ばしく美しいことどもに現代は満ちているのでしょうか。確かに、現代は目を引かれるような美しいものに溢れているように見えます。満天の星々の光にも勝るような美しさを私たちは、色々なもののうちに見出して心躍らせるかもしれません。でもその美しいものが、イエス様の御言葉とのつながりもないままに、目の前に差し出された時、私たちはそれに誘惑されることになるかも知れません。荒れ野の中をさ迷ったイスラエルの人々が目に見える金の子牛の像を作って喜んだような偶像崇拝の誘惑の罠が、現代社会では至る所に見られるのです。

現代人が、思いがけない時に来られるイエス様のために用意して待っていることが難しいことの端的な理由は、この様に見えるものに目を奪われてしまい、聞く事によって信仰を深めていくことが困難になっていることにあります。それは信仰者が信仰を続けていく生活においても襲い掛かって来る困難さであります。私たちはどうしても、目に見えるバラ色の生活に憧れ、それに心惹かれていく弱い者なのです。でもその弱さ自体を強めてくれるのも、又イエス様の御言葉であります。イエス様は「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」と弱い私たちに言われています。この御言葉は、十字架で死んでも復活されたイエス様が、信じる者たちに与えられる激励の御言葉です。どうか私たちが、主イエスの再臨を待つ間、御言葉に聞き励まされながら、日々、新たな美しい出来事に招かれますよう祈り願います。

祈ります

父なる神

私たちは今、分裂の時を過ごしています。争い、分派、戦争、などの辛くて心悲しませる出来事が絶えることがありません。どうか、苦しむ私たちに、あなたが寄り添い、慰め、あなたの愛によって立ち直らせて下さい。

私たちをあなたの平和にあずかるのにふさわしい者とし、その平和にあずかることが出来るようにしてください。

御子が再び来られる時まで、私たちが信仰、希望、愛を増し加えられ、御言葉を聞いて行う者とならしめてください。私たちを聖霊で満たし、目に見える聖霊の果実を、折に触れて味わうことが出来ますように。

御子が来られる時に、私たちが平和であり目を覚ましていることが出来ますように。御子がそばに来て、食事の席で給仕して下さることが出来ますよう、常に私たちを平和のうちに保って下さい。

父と聖霊とともに